松山幸生先生講述

ヘブライ人への手紙に学ぶ

全32回--21

2023年04月

写者

小原靖夫

第21回　信仰の先達として証しされた人びと①

義人アベル・エノク・ノア

第11章①節から⑦節　　信仰とは

① 信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。

②昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました。

③信仰によって、私たちは、この世界が神の言葉によって創造され、
従って見えるものは、目に見えているものからできたのではないことが分かるのです。

④信仰によって、アベルはカインより優れたいけにえを神に献げ、
その信仰によって、正しい者であると証明されました。
神が彼の献げ物を認められたからです。
アベルは死にましたが、信仰によってまだ語っています。

⑤信仰によって、エノクは死を経験しないように、天に移されました 。
神が彼を移されたので、見えなくなったのです。
移される前に、神に喜ばれていたことが証明されていたからです。

⑥信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。
神に近づく者は、神が存在しておられること、
また、神は御自分を求める者たちに報いてくださる方であることを、
信じていなければならないからです。

⑦信仰によって、ノアはまだ見ていない事柄について、神のお告げを受けたとき、
畏れかしこみながら、自分の家族を救うために箱舟を造り、
その信仰によって世界を罪に定め、また信仰に基づく義を受け継ぐ者となりました。

今日はヘブライ人への手紙の第11章、「信仰とは」というところから具体的な事柄を考えながらご一緒に学びを進めていくわけですけれど、先ずこの聖書の区分に従って分けてゆきますと、①節②節が「序説」に当たるのです。8

①節、②節、
信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました。

この①節②節の解釈が、これから述べる第11章、あるいは12章にも亘りますが、ここが「総論」となりますので、先ずしっかりここを押さえて読んでゆくことが大事であろうと思います。
この部分は、色々な訳が皆さんの念頭にも記憶されておられるだろうと思いますが、その中で一番元気のいい、勢いのあるのは文語訳ですね。
「それ、信仰とは望む所を確信し、見ぬものを真実とするなり」という御言です。
それと比べると表記の訳は、何となくひ弱な感じがする、インパクトに欠けると言う人が沢山います。私も、それはやはり無視できない指摘だなと思うのです。

文語訳の場合、「望む所を確信する」のは＜私＞ですね。「見えないものを真実とする」のも＜私＞なのです。ですから、『私の信仰』というものが非常にバイタリティに富んで、積極的に前向きになる時、すべてのことはうまく廻ってゆくのだという発想から＜信仰＞という言葉を捉えようとする人々には、この文語訳は実にぴったり来るようです。

しかし、＜信仰＞とは、本来そういうものなのだろうか。＜私＞が頑張ることによって、励むことによって、強く信じることによって、「神は、私たちの神となっていく」のだろうか。どうも、そうではないのではなかろうか。9

また、福音主義教会などで用いられている「新改訳聖書」には、こう書かれています。
「信仰とは、望んでいる事がらを保障し、目に見えないものを確信させるものです。」
これは、『私の信仰』を通して、神の望んでおられる事柄を保障する(確認する)と共に、目に見えないもの（即ち、神に由来するもの）を確信にまで至らせると読みとれます。

しかし、これを読んで、「だから『私の信仰』というものが、極めて大事なものなのだ」ということを、中心メッセージとして受け取ってしまう人もいるのです。

聖書66巻を通して読んでみますと、確かに「神を抜きにした（神をないがしろにした）人の行ないや決心、諸々のわざは、たとえ、その人にとってどんなに良いことであっても、何一つ神をお喜ばせすることはできない」という原理原則がそこかしこに示されています。では、『私の信仰』というものは、常に全くの独りよがりなものとして、そこに当て嵌められてしまうのでしょうか。

その疑問の答えには、続く②節に「昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました。」という御言が、文語訳にも新改訳にも同時に記されています。ですから、『この（彼らの）信仰』、即ち「彼らにとっての『私の信仰』というもの」も、むやみに排除せずに、きちんと受け取ってゆかなければなりません。
それを踏まえて、ここでは「信仰とは」とか「信仰ゆえに」と書かれてある御言を、いったい、どのように捉えていったら良いのか、私は先ずそこらあたりから、この御言をもう少し丁寧に掘り下げねばならないと思うのです。

③節
信仰によって、私たちは、この世界が神の言葉によって創造され、従って見えるものは、目に見えているものからできたのではないことがわかるのです。

要するに、目に見えているものには、本質的な（または絶対的な）価値はないのです。むしろ、それを存在に至らしめた「背後に在る見えない御力」、ヨハネによる福音書によれば「ロゴス；神の御言」が大事なのです。その「御言」によって世界が創造され、保持され、支えられていることを『私たちが理解し、信じること』、それが＜信仰＞なのです。

つまり、③節の御言は、「信仰とは、未だ実現していない希望の中に、確実な神の御言の成就を『見ることができること』、見えるものに覆われたその奥底にある本質、即ち、見えない神のわざを『認めること』、それが＜信仰＞なのです」と語っているのです。
① 節の「望んでいる」と訳されている言葉は、原典では受動態ですから「望まれてい

る」ことです。従って＜信仰＞とは、「神に、私たちが望まれている事柄を私たちが出来うる限り理解すること、そして、未だ不確定で分からない、心の目には見えてこない、そのような事柄に関しても、それを現実に至らせてくださる神の御力があることを確かに感得し、それが神の啓示に至るときまで待てるということ」であろうと思います。そして、それを＜信仰＞とするならば、「信仰とは、偉大なる全知全能の神と、その神の御力の啓示を確かに待てる私たちとの、双方向のわざ」ということになります。[11]

『確信する』と訳されている言葉は、人間の主体的な心の働きにもみえる言葉であるゆえ、＜私が＞信じ、＜私が＞行動し、＜私が＞ある確かな結論に至った、という解釈になりがちです。しかし実は、ここで使われている『確信する：ペイソー』という言葉の目的語には「ヒュポスタスシス」という特別な用語が使われており、これは、「本質的なもの」とか「隠されているもの」とか「基礎や土台」という『目には見えない大事なもの』という意味の言葉なのです。よって、何を『確信する』のかと言えば、「隠されている大事なものが神により具現化されてゆくこと」、「見えてはいないけれども、神が語られた言葉は確実に成就すること」となります。

つまりは、私たちが活動するに当たり、足の下の土台に据えられている目に見えないものに対し、心の目を注いで生きてゆくことが＜信仰＞というわけなのです。更に、そこに自分というものを置いて保つとか、あるいは忍耐してそこから現れ出るものを待つとかいうように、段々とその意味が深められてゆき、ついには『確信する』に至るのです。その『確信する』は、「本質を掴む」という意味に捉えて頂いても良いのではと思います。

従ってキリスト教の信仰は、過去の出来事に照らして確認するだけではなく、ヨハネの黙示録のように、終わりの日に目を向けて「アーメン、主イエスよ、来てください」と祈り、「神が終わりの日にすべてを完成してくださることに盤石なる望みをかけて、今日を生き、明日を歩んでゆく」ことを、『確信する』に至らせるのです。[12]

ですが、どうも私たちは信仰に対して「西洋医学的な発想」がやや強く、対処療法的なものとして捉える傾向にあります。今こんな問題があるけれど、信仰によって乗り切りましょうと。それは間違いではないかもしれませんが、＜信仰＞という言葉の一断面しか表わしていません。今こんな問題があるのだけれど、主が約束してくださる終わりの日には

すべては解決されるのだから、その日を待ち望む信仰をもって今を生きましょう、ということならいいのですが・・。
そこに、パウロが言った言葉をそのまま使って、「神もし我等の味方なら誰か我に敵せんや」と、祈りの時も持たずに、ひたすら突き進むことだけが信仰だと思ってしまう・・
それは、聖書本来の＜信仰＞という定義からは大分かけ離れていると思います。

では、私たちはどのように信じ、生きていったらいいのでしょうか。信仰とはどのようなものなのかが当然そこでは問われてゆきます。
先ず、私たちに信仰が与えられているということは「神が、私たちに望まれていることは、必ず実現する」と本気になって信じ歩んでゆくことだと思います。

でも下手すると、それが逆手になることがありうるのです。「信仰さえあれば、私が望んだことは必ず成就される」という理解、これは割合楽なのです、そう思うと元気が出てくるからです。ですが、人間が望んだ通りのことが実現する、人間が描いた夢が可能になる、などというのは、神の世界ではないのです。神の世界は、私たちの意向に拘わらず、神が私たちのために御心を実現されてゆく世界なのです。

例えば、アブラハムは旅立って、そこで「子どもがいたらなあ」と思っていたけれど、彼が子どもを願ったから与えられたのではなかったのです。神は、嫌というほどそのことを彼に示そうと思い、もはや彼らに子どもが生まれる可能性が全くなくなるまで「忍耐して待たれた」のです。
そして、そうなってから「さあ、子どもが生まれるよ」と告げられた。神を信じていたアブラハムもサラも心の中で「まさか、ご冗談でしょ」と笑った。その可能性を神御自身が全く絶ってしまわれた現実の中で、子どもを与えると宣言された神は、その御言通りを、「神の御業として」履行なさったのです。（詳細は第20回を参照）

ですから、それは＜私が＞祈り願ったから、＜私が＞希望したからではなく、「すでに神が憐れみ続けてくださっていて、その神が成就されたのだ」ということをしっかり押さえて置く必要があります。その辺がはっきりしないと「信仰を持っている者は何でもかんで

も可能なのだから、私は強いのだ」ということになる。しかしそのようなことを、聖書は言っていないのです。

そこで私はあえて「神に期待をかけて生きること」と「信仰」という言葉とを区別して使っているのです。[14]
それは、とかく私たちは信仰を『神が私に一方的にくださった御恵み（恩寵）』とするのではなく、あくまで『私が神を信じていることへの御報い（褒美）』とし、私の努力に大きな実りが得られた、これが信仰の成果だと思い込んでいるところがあるからです。

そうなった上で「信仰がなくては神に喜ばれることはできません」という言葉を読むと、「だから、この世の人は駄目なんだ、信仰者である私たちはいつも神に喜ばれているのに。」ということになります。ところが、最初に信仰を与えられたユダヤ人は、神を喜ばせるどころか、神の独り子を憎んで十字架に架けて殺したわけですから、「信仰を受けていても、神に喜ばれない人間がいた」わけです。となると、この信仰という言葉そのものを、もう一度見つめ直してゆく、土台として確認し直してゆく必要があると思うのです。

私たちが色々なことを考えてゆく時、「先ず基本は、神が私たちに約束してくださった事柄が確実にどんな状況をも貫いて実現されて来たことに目を留める。死にそうになっている信仰にも憐れみと御慈愛をもって、なお消え失せないように支え続けてくださっている、その神からの賜物として私たちに与えられているのが『信仰だ』。」と考えてゆきますと、『私の信仰はまだ弱くて・・』などと言うのは、私たち流の謙遜や弁解かもしれませんが、その信仰を支えられる神に対しては大変失礼に当たるのではないでしょうか。

私たちは信仰の量や質を人と見比べて、大きな信仰、小さな信仰、強い信仰、弱い信仰、とか言いますが、神の御目からは五十歩百歩、団栗の背比べですから、そんなの感覚で自他の信仰を量っていると大変な問題になって来る、いつのまにか「自分の判断、自分の物差しが中心に」なってしまいます。[15]

「神が中心でなければ信仰は成り立たない、だから、神が私に対して不都合と思えることをなさっても、それが神の御計画、私の正道なのだと受け止める」のが、信仰なのです。私たちはとかく、神も今回ばかりは見誤られたとか、神はいつまでこれを見逃しておられ

るのかとか、今は苦しみの時だとか、今は時ではないとか、苦難は我慢すれば何とかなるとか、そんな中で感謝しないからなかなか喜び事がやって来ないとか、・・他者にそのような勝手なアドヴァイスをし、自分にも言い聞かせたりします。
更に、私たちは「忍耐することも恵みですよ」と、人に諭したりしますが、はっきり言うなら、これは、「忍耐は、信仰におけるあなたの誉れですよ」と告げるような、その人にとって過重なものを聖書的な言葉でお返しする無責任で危険な発信なのです。
そういう自分の側からの発想（思いつき）として＜信仰＞を口にして行くと、この「信仰とは望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです」という言葉が独り歩きを始め、自分勝手な判断によるメリットや功しに変化させてゆく危険性があるのです。
「私はそういう信仰をもっているのだから、私の信仰は確かだ」と思い込ませてしまうのです。

「神は約束してくださった事柄に基づいて、その恵みを一つ一つ実現してくださっている。そしてまだ私たちには見えていないが、神が与えてくださった究極の救いの約束は御言葉によって確実に完成されて行き、神の御力がこの歴史を、この世界を確実に動かしておられるのだ」という認識や理解が生まれて来ないと、私たちの信仰は、その場限りの信仰になってみたり、対処療法的な信仰になってみたり、グラグラしてしまいます。

私は自分の教会でも言うのですが、日本人の信仰理解の中で一番難しいのは『時が神のものだ』という認識なのです。今生きているこの時も、人生の季節の明け暮れも、神の定められた天寿も、最善を図られる神によって与えられている「すべて恵みの時なのだ」ということがなかなか認識できない。（それは、私たちの国の年号が現実に見える天皇家の歴史によって区切られていますから、その発想からなかなか抜けられないからでありましょう。）

「神の時」の中に私たちが生きていると感得すれば、この時を動かしているのは神であられることが分かるのです。ですから、私たちの目の前に見える現実が、すべてが神に逆らうようなことを行なっているように見えていても、神がこの歴史を支配されている限り、神御自身が十分ご承知なのですから、そのことで私たちが慌てふためいたり、恐れおののいたりする必要はまったくないのです。

ただ、「神の時」であるのに、それを「自らの時」として徒に奪い取ったり、掠め取ったりする現状は、絶えず明確に指摘し是正してゆかねばならない、それには責任がかかっています。その意味では「時の見張り人として、絶えずこの世に対して対処して行かねばならないという役割を担わしめられていること」をはっきりと認識しなければならないと思います。

そうなって来ると、私たちの生きている現実は、神の御言によって生かされているにも拘らず、「それは違う」というねじ曲げられる事柄が余りにも多すぎます。だから、「見張り役」も疲れてしまい、もう止めた！ということになり兼ねない現実もあります。
でもかつて、命をかけて、そうした歴史に対し抵抗していった人々がいます。社会改革運動をしたわけではないのですが、その神の御言を告げ続けた人物は「預言者」です。彼らは自分の命を捨てて、神の命に立ち上がっていった。17
「預言者は生涯、自分の命を計算に入れないで、神の御言の実現のために仕える存在であった」のです。

第②節、
昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました。

ここに、「昔の人たち（というより、先祖たち、先達たち）；プレスブテロス」という言葉が使われており、その派生語は、「プレスビテリアン」と言われている「長老派」のことを指しますが、これはプレスブテロスという意味そのものを、自分たちの生き方にしている人々です。そうした長老という役目は、どのような人々に課せられていたかというと、「信仰の聖く優れた人、人々の模範とされる人」です。今の教会の長老さん、皆さんそうだと私は思います。

ですが、長老であり続けることはすごく大変なことなのです。神の前に生かされていることをどんな時でも言い表し続け、「神はこのように私たちを支え動かし、この歴史を担っていてくださるのですから、何が起ころうと恐れることはありません」と皆にはっきり証しして生きている人、それが「プレスブテロス」です。そういう人たちが「この信仰のゆえに神に認められました」と言われる人々なのです。

この「認められた」という意味に使われている言葉「マルトュレオー」も面白いですね。ラテン語では「マルティレオ」と言います。長崎に行きますと、色々な所に片仮名で「マルチリ」と書いてありますが、これはマルティレスというラテン語から派生した言葉で、「殉教した人、殉教者」という意味の言葉です。

ですが、②節の場合は、殉教という意味ではなく「認める」こと、神によって認められることです。「この世の法廷で神の正しさを証言する人々、それがこの地上の人々に対して、異教の社会でも、神こそ真実であることを証言し続ける人、神はそのようなことができる人として『信仰の先達』をお選びになり、養ってくださいました」と言っています。

このように＜信仰＞という言葉に真摯に向き合うなら、私たちの現状などを神に訴え出るのではなく、それはむしろ神が与えてくださった御恵みであり、その御恵みにより強く立って、励ましをお受けし、神こそが、唯一の支配できる御方であることを指し示し続けてゆく。天地創造の出来事から今日に至るまで、神を、私たちを愛し守り支え続けておられる唯一の御方として明確にしてゆく。そのことが＜信仰＞だと思うのです。

ですから、ここではっきり捉え直してゆくべきは、「信仰とは、概念でもなければ観念でもない。哲学でもなければ原理でもない。私たちが追求し続けることによって獲得できるものではありえない。」ということです。＜信仰＞とは、私たちの側からは、どう考えても生み出せる代物ではないからです。
ですから、よく「キリスト教の信仰がもう少し合理性を持っていてくれたら、伝道しやすいんですがねえ・・」という方がおられますが、これはもう、根本的に間違いです。[19]

信仰とは、初めから私たちにとって合理的ではないのです。私たちが作った物差しで寸法やサイズを量るようなことができないからです。ですから、それらのものでしっかりした枠組みを拵えようとすること自体、土台無理なのです。ですが、私たちがそんな風に考えたがるのには、自分の常識とか知識で信仰とはこんなものかなと量ろうとしたい証拠です。逆に言えば、ここでは「信仰の捉え方によって、私たち自身の器が量られているのだ」という発想が必要になっているのです。

信仰が私のサイズに合うようにと、神が時には調整して与えてくださる。私のサイズにぴったり合うものが信仰なのではなく、本来はもっと成長して大きくならなければならないのだけれど、私が未だ小さく未熟の者だから、そんな私にも着られるように、今のところこのようにして（縫い縮めた信仰を）着せてくださっているのだ。こうしたことを理解し、受け入れることはとても大事だと思います。「信仰の成長」とはそういう意味で問われてゆく事柄だと思います。

その成長に関して、「良く知り、良く学び、神のことについて研究を重ねると、信仰はどんどん深くなり成長して行きますよ」と言う人がいますが、そうではないのです。それは**神と出会い続ける中で初めて与えられる**もので、神が必要と認めれば、神学、聖書学などの学問がなくても深い信仰心が与えられます。そういう生き方ができるようになります。**目に見えているものよりも見えないものによって、この現実が動かされているのだということを本気になって信じて歩んでゆけば**、です。歴史の背後（いや、むしろ中心）にある神の御手と御働きを見つめ、その中で私たちが歴史を捉え直して生きてゆくことが必要になって来るのです。[20]

ここまでは「信仰定義に基づいたこと」でしたが、第③節からは「信仰によって」ということが非常にたくさん出て来ます。⑫節のところまでに、きちんとした格好で「信仰によって」と書かれているところが７回あります。

第③節、
信仰によって、私たちは、この世界が神の言葉によって創造され、従って見えるものは、目に見えているものからできたのではないことが分かるのです。

最初に天地創造の問題を取り上げ、「この世界が神の言葉によって創造され」というのは、とても大事なことなのです。私たちは神がお創りになったと言うと、先ず創るための材料があって、その素材を用いてお創りになったと考えることが多いのです。しかしそうではなく、「何の素材もなかった。即ち『神の御言だけ』があった。その御言だけが、すべてのものを造り出したのだ。その御言に従ってすべてのものが、分けられ、調え直されてゆく、形作られてゆき、意味を与えられていった。

それは神の御意思が先行して初めて成ることであって、「そこにモノがたまたまあったからそれを用いられた、ということとは違うのだ」と言っているのです。ですから、著者がこの手紙の中で一所懸命これを書いたのには大きな意味があるのです。21

天地創造の物語は、メソポタミア文明の中で作られた『天地創造の記録』をベースにして、その事柄を進行する役として神を登場させ、「神が告げられたからこうなった」という書き方をしています。

その記録を「ユダヤ人たち」が読みながら、恐らく彼らは「元々あった諸々のものに神は意味を与えただけなのだ。材料がなければ神は創造できなかったのだ」と考えたのです。その発想がユダヤ人たちにとっては大事だったからです。なぜなら「俺たち、律法の番人がいなければ世界は救われない。神が事を始められるにしても、根っこになる材料は必要だ。そして神が、俺たちを選民としてお選びになったのは、その根っこにするために選ばれたのであって、俺たちこそ特別な意味をもっているのだ」と考えたわけです。そのような姿勢で天地創造の物語を読んでゆくと、「すでに混沌としたものがあったから、神は陸と海を分けられたのだ」となってしまい、神は、無から有を創りだされる全能者ではなくなってしまわれるのです。

神の全能は、そのような混沌がなくても陸と海を分けられる御力を発揮され、そこに、必要があって神は、光に対峙する混沌；カオスを置かれ、そこに意味を与えてくださったのです。「神は、どんなに醜いと映るものも、つまらないと見えるものも、無価値と思えるものも、人間に忌嫌われるものさえも、神の御恵みの中で位置づけられて、神の御役に立たせられ、価値と意味とをお与えくださる御方なのだ」ということが、**『もう一面で語られる天地創造の物語』であるわけです。**22

「御言なる神」は、何がなくても、ここにこれが必要だとお考えになったら、確実にそれを生み出す御力を持っておられる。ヘブライ語で**「言葉」という単語は「ダーバール」と言いますが、その原意は「見えないものが見えて来る、無かったものが存在する」ということです**が、それこそが『神の御言』なのです。今は何も見えていないが、神の言われたことは、何もない中でも確実に私たちの中に現存する、＜信仰＞とは、それを信じ抜いて生きてゆくことなのです。

ですから、その成就の形だとか大きさは分からなくてもいいのです。この世の人々が、「神が新しい世界を完成なさるのなら、それはどんな世界ですか」と問う時、「私たちが見たこともないような神秘です。聞いた事もないような不可思議です」と答える以外にないのです。でもそう答えるには（私たちもこの世的に生きていますから）抵抗があります。そんなことを言ったって分かってくれないだろうと考える。しかし、ヨハネ黙示録には「あなた方が見たこともないことが起こる」と書いてあるのですから、それで良いだろうとも思います。23

天地創造の出来事も、「神の御言によってすべてのものが創られた。材料などなくてもできると告げねばならない。可能性などなくても生まれるのだと語らねばならない」というわけですから、それに対する私たちの＜信仰＞が問われてくるわけです。
その神の意思をきちんと捉えて、「従って見えるものは、目に見えているものからできたのではないことがわかるのです」と書いてあります。
天地創造の出来事を読むとき、「これらのことを土台にして読んで行くことが大事ですよ」と、著者はユダヤ人に向かっても語るのです。

第④節、
信仰によって、アベルはカインより優れたいけにえを神に献げ、その信仰によって、正しい者であると証明されました。神が彼の献げ物を認められたからです。アベルは死にましたが、信仰によってまだ語っています。

「信仰によって、アベルはカインより優れたいけにえを神に献げ」と、この辺に来ると俄然論議が賑やかになります。なぜカインとアベルの間に不平等が起こり、カインがアベルを殺さなければならなかったのか？　そこには神との間に何があったのか？そのような問いで詰め寄られると、苦肉の策で、色々説明を付け加えます。

それは、「カインは畑で採れたものの内、『まあ、これ位でいいか』と、神の御前に持っていったんだろうし、アベルは一所懸命選び、自分の羊の中で最高の羊を献げたのだから、神はそれを喜んで受け入れてくださったのだろう」などの説明ですが、そのようなことはどこにも書いていないのです。

ならば、「初子の雄で健全なものは、自分の財産を増やすには一番先に取って置かなければならないものです。それを神に献げることは『私の富のすべてをあなたに献げます』という証しになります。打算を越え、感謝をもって献げますということになりますから、そういう献げ物を神は喜んでくださったのです。」と説明します。

問題はその後です。
神が喜んでくださらなかったから、兄貴の方は怒った。自分の献げ物は神が喜んでくれなければ意味がないと考えた。兄も自分が感謝をもって献げているのならば、神に「弟の方がよかった」と言われたとしても別にどうということはないはずですが、結局「自分の内心がそこで量られている」という自分側の指摘に、辱められる自分がいたのです。25
必要以上に自分自身をデスカウントしてしまった。自分の後悔を他人のせいに転嫁して行動してしまった。カインは「殺す」ということ「殺される」ということが分かっていなかった初めての殺人を犯してしまったのだ。）

子どもと付き合っている時に一番難しいのは、皆が色々なことを言ってくれた時に、「一人の子だけに、有難う」と言うと、他の子はむくれますから 「皆に、有難う」と言わなければならないことです。それは子どもに限ったことではありません。誰でもみんな、自分が提供したもの、献げたものを、高く評価してほしい、認めてほしい。言い換えれば、自分の行動を正当評価（いや、過剰評価）してほしいという欲求があるのです。
（真に、人は認知欲の塊です。）

「一人前の人格をもった人間」が、神との出会いの中で自分を高く評価してほしいという欲求を持っていたとすれば、それがいかに不埒な思いであるか、神への信仰が問われる恥ずかしいことであるかが、自分自身に分かります。神が私に**「献げるべきものを恵んでくださった」だけでもう十分なわけで**、こちらの行為に対して神に謝辞など言われなくてもいいわけです。献げたものを神がどう扱われようと、それは神の御自由、御勝手なのです。・・だのに人間は、そこで神はどうされるかじっと見ていて、向こう側の方がより受け入れられれば、俺の方には神は不公平だ、という神への不満が生まれてくるのです。

著者は、弟アベルの神の御前での正しい生き方を、「優れたいけにえを献げた」という言葉で表現しています。また、このことがある意味「アベルが羊を献げた以上に、自分の命をも神の御前に投げ出す事態に繋がっていった」といういきさつを重視され、アベルの神

に対する供え物への姿勢や信仰を認められ、反対に、殺人者の兄カインが神に対して不従順であった事実を明確にしていったのです。

同じように、私たちの不従順のために御血を十字架上でお流しさせる事態となった「イエス・キリスト」、その御方との結びつきが重要な問題になって来るのです。そして自分も兄に血を流されたアベルは、その血潮の叫びによって殺人者の兄カインを呪っているけれども、同じように殺されながらも神の子であられるキリストは、その血潮の叫びをもって『この人々に罪を負わせないでください。彼らは自分のしていることが分からないのです。』と神に向かって執り成しを祈ってくださっている。この違いという気づきに一つのウエイトを置いて、アベルの血の問題を見ていくことが出来ると思います。

「アベルはカインより優れたいけにえを神に献げ、その信仰によって、正しい者であると証明されました。神が彼の献げ物を認められたからです。アベルは死にましたが、信仰によってまだ語っています」
これは、ユダヤ人にとってはとても切実な事柄なのです。彼らは虐待されて自分たちの国家が無くなっ**て**しまったのですから。その中で虐待した者が神によって呪われる**の**だから、彼らを呪ってくれと叫んでいる。そのうちに神はきっと応えてくださるのだという思いが強くあるのです。著者は、そういう人々に今、手紙を書いているというわけです。

第⑤節、
信仰によって、エノクは死を経験しないように、天に移されました。神が彼を移されたので、見えなくなったのです。移される前に、神に喜ばれていたことが証明されていたからです。

これも興味深い記事だと思います。
当時の状況を知る書物は色々ありますが、例えば、新約聖書と旧約聖書の間に書かれた「外典(新共同訳では続編と呼んでいる)』ものの中に『シラの書』というのがあるのです。そこにはイスラエルの信仰をもって生きた先達たちへの讃歌が載っています。その第44章⑯節に、『エノクは、主に喜ばれて天に移され、後世の人々にとって悔い改めの模範となった』と書いてあります。

その後、ノアについても書かれていますが、このエノクが天に移された理由は何かと言うと、「後世の人に、悔い改めをするとはこういうことなのだとの模範を示した」とあります。が、ここでは**エノクが特に立派であったとは書かれていません。**エノクは信仰をもって神にお仕え続けていたので、後の世の人たちに「信仰をもって生きることはこんなにも素晴らしいことなのだ」とわかるように、（死を経ずして）天に移されたのです。だから「エノクの信仰は個人の所有物や獲得物ではなく、神が彼をお用いになるためにお授けになった『聖さ、神へのへりくだりの心』なのです。それを私たちにも分け与えてくださる。その分け前によって、献げる恵みにも富まされる。」これが、エノクを通して語られている信仰なのです。（「エノクは神とともに歩んだ」創世記5章㉒と㉔）

＜信仰＞とは、そのように一人一人のうちに働かれる（その具体的な働きかけは各々異なるますが）神様から分与された御恵みに、相違ありません。28

第⑥節
信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神が存在しておられること、また、神は御自分を求める者たちに報いてくださる方であることを、信じていなければならないからです。

「信仰がなければ、神に喜ばれることはできません」言い換えれば、「神の御存在を、自身の存在の大きな背景、理由、根拠と確信して生きていない人間は、神に喜ばれない。」つまり、＜私が＞信じたということだけでは、信仰は駄目なのだ。神から与えられた御恵みとしてその信仰を保持しているという自覚のある人間でなければ、神には喜ばれない。

何かができるとか、役に立つという人間としてではなく、アベルは自分の全財産が神の所有であるということを自分の内に明らかにして、一番良いものを神様に御献げしました。エノクも自分の全生涯が神様のものであるということを弁えて歩みました。だから神は、彼の全生涯を贖い取ってくださったのです。「天に移された」とはそういうことを言うのです。そのように、信仰を本当に生きている、その中で自分を相応しく調えて歩んでいれば、神に喜ばれます。それができなければ、他にどんなに大きな業ができたとしても、神に喜ばれることはありません。

「神に近づく者は、神が存在しておられること、また、神は御自分を求める者たちに報

いてくださる方であることを、信じていなければならないからです」

神を信じることとは、神が現実に在って、求める者たちに働きかけてくださることを信じることですから、それがないと神に喜ばれません。私たちは、自分が何か業を繰出し、結果を出すのを何より大事に考えがちですが、著者は「あなたに出来る最高のことは、神に近づくこと（へりくだり）です」と言っているのです。

第⑦節
信仰によって、ノアはまだ見ていない事柄について神のお告げを受けたとき、
恐れかしこみながら、自分の家族を救うために箱舟を造り、その信仰によって世界を罪に定め、また信仰に基づく義を受け継ぐ者となりました。

ちょっと私たちには分かり難い書き方をしていますが、もう少し説明を加えれば、「ノア」は、快晴の真っ昼間、「大雨が降り続いて、この山のてっぺんまで水が来るぞ」という、未曽有の天災について神の御告げを受け、「ここで舟を造りなさい」と命じられた時、彼は「神が告げられるのだから」と信じ切って舟を造った。仰せの通りの大洪水が来た時は、せめて家族が助かるようにと、山上で一所懸命舟を造ったのです。

彼は、皆から馬鹿にされ、社会からは除け者にされ、おかしな奴だと罵られたけれども、一途に神の御言は確かだと信じ、家族を箱舟に収容した。だからノア一家だけは救われた。神の御言だけに従って救われたのだ。造った箱舟が彼らを救ったのではない。神に舟に入るようにと命じられたから、家族もその御言に従って救われたのだ。

しかも彼は、畏れかしこみながら神の命令を実行した。それによって救いを得たということは、神の御言に耳を傾けなかった者はその結果、滅びを経験することを示し、「神の御言に従うということが『義』であり、従わないのが『罪』であることを明確にしたのである」と著者は語っています。[30]

「信仰者が生きる時」それは同時に「信仰を持とうとしない者を罪に定める時」と著者は言わんとしているのです。無論、私たち人間にはそのような裁きの業は発動できませんか

ら、「神が与えてくださる信仰を拒絶する者は、それにより罪に定められるようになります」と、ノアの話を題材に教え伝えています。

⑦節後半、また信仰に基づく義を受け継ぐ者となりました。
このようにしてノアは、神との約束を生きる存在となりました。箱舟から出て契約の虹の前に立ち、神との約束をそのまま受け継いで、子どもたちに伝えていく者となりました。神は、このようにして私たちを憐れんでくださり、もはや大洪水によっては人々を滅ぼすことはないと義人ノアに告げられたことは、全人類への御約束ともしてくださいました。

＜信仰＞は、私たちの身の周りに起こって来る現実の問題の中で、その対応の仕方として、真に問われてくるのです。ある意味、神を信じるか否かは命賭け（永遠のいのちがかかっている選択）の問題であり、それが人生の課題だとも言っているのです。
たとえ、自分の命を投げ出してでも、神を私の主なる神となして生き続ける、すべての人が「そんな馬鹿な」と言っても、神の御言通りを自分の人生の道として歩み続ける。「真実は神の御言以外には無い」とはっきり定めて生きてゆく。ですから『信仰によって』というのを別な言い方をすれば、**『唯、神の憐れみと慈しみに縋って』と捉えても良いと思います**。31（この言葉を松山幸生先生は説教の中で繰り返し強調されました。忘れ難い力のこもった説教でした。）
そして、こうしたことを改めて自分たちの最も身近な問題として見つめ直すのも、大事なことではないでしょうか。

今日学んだテキストは、イスラエルの歴史のさわりの部分を取り上げながら書かれていましたが、その後の⑧節からは「アブラハムの信仰」について書かれています。アブラハムは当時のユダヤ人にとっては「信仰の父」ですから、アブラハムのことは＜信仰＞を抜きにしては語れないのです。これは来月学んでみたいと思います。
今回の冒頭でも申し上げましたように、「第①節②節の言葉」を、皆さんお一人一人がどう受け止めて解釈し、それによってどう生きて行こうとされるのか、この11章を学んで行く過程で考えて行かなければならない重要課題だと思います。ヘブライ人への手紙にこう書いてあるからではなく、「それが、私自分にとって本当にアーメンなのか」を、よくよく捉え直してみる必要があると思います。　(1997年10月11日)

写者あとがき
私は自分の信仰の立て直しのために、写書することを願いおゆるしを得てこの大事業を始めました。その鮮明な理由はこの第11章の理解ができていなかったことです。この1年半の多くの方々のご指導により徐々に成長している自覚が生じ感謝にたえません。そしていよいよ第11章の学びになりました。「信仰とは」を学ぶ前に私が知るべき御言がありました。第11章の根幹を明かにしてくださっている下記の文章です。

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」（ヨハネによる福音書15章⑯節）
「天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、ご自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです。神がその愛する御子によって与えてくださった輝かしい恵みを、わたしたちがたたえるためです」（エフェソの信徒への手紙1章④節～⑥節です。
前者は原理的なことを述べ、後者はより具体的に述べています。すなわち、選びは天地創造よりも前に位置づけられるべき神の御業のそもそもの初めであること、神はその選びのご計画に基づいて御子を世にお遣わしになり、アダムにおいて犯された罪を贖われたこと、それはわたしたちを神の子とし、御国の民とされた恵みをとこしえにほめたたえる者とするためであった。（上田光正著「和解の福音」教文館刊p14より引用）

松山先生は私のような「分からずや」を見透かされたように丁寧に①節②節を説き明かして下さっています。
聖書の正しい理解には原典を読み解く力とイスラエルの気候風土を感じとる力が必要だと痛感します。特に受動態の表現を読みこなせすことが難しいです。しかし、主は言われます「見ないのに信じる人は、幸いである」と。自分自身がトマスであり、ナタナエルであることを告白します。

「確信」と「確認」、何をどのようにしなければならないのかという疑問が解けました。お導きに感謝でございます。「隠されている大事なものが神により具現化されてゆくこと、見えてはいないけれども、神が語られた言葉は確実に成就すること」「神が終わりの日にすべてを完成してくださることに盤石なる望みをかけて、今日を生き、明日を歩んでゆく」ことを確信に至らせる信仰に導いてくださる恵みを頂いていることに気づきました。

私は無意識といいますか本能的に「命は与えられたもの、時間は命です」とよく他人には言ってきましたが、自分自身が本当にそのような生活をしてきたかと反省しますと懺悔するほかありません。今、この時に至って「時間は神のもの」の実感を強くしていますが、さりとて時間を神にお返しするようには使っていません。心は燃えていても肉体は弱いと言い訳をして床にいる時間が長くなっています。

恥ずかしい話が続きますが、妻が30年前に、まだ生活が安定していなかった時ですが、お墓を買おうと言い富士霊園に格安の価格で求めました。19年前母が召天しまして、お墓に文字を入れる時がきました。私は一番好きな言葉「希望」を墓石に刻みました。その時の希望には深い意味がありませんでした。これも無意識だったのです。こうした自覚のないところでの導きは私の生活には夥しくありました。過去を振り返ると「確信」に近いと感じています。「わたしは、既にそれを得たというわけではなく、ーーーなんとかして捕らえようとして努めているのです。」（アブラハムが得たのは墓地のための土地だけであったことを、今頃気がついたのです。）

松山幸生先生は「ヘブライ人への手紙」は旧約と新約の架け橋となると言われました。今回も信仰の先達の説き明かしがありますが、私はカインとアベルについての説明にも奥深い意味を見出しました。TA心理学でストロークとデスカウントという定義で学ぶところがあります。ストロークとは「存在を認める働きかけ」、デスカウントとは、「無視する、軽視する。意味を深めると比較するも含みます」。TAの提唱者であるエリック・バーンは「人はストロークを得るために生きている」と言い人を認知欲の塊だというような表現をしています。相手を認めるのも自分を認めるのもストロークです。相手を無視し自分を軽視するのはデスカウントです。この理論で聖書を読むのは軽薄かも知れませんが、カインの心情が行動となったことが理解できました。

神を信じることとは、神が現実に在って、求める者たちに働きかけてくださることを信じることですから、それがないと神に喜ばれません。私たちは、自分が何か業を繰出し、結果を出すのを何より大事に考えがちですが、著者は「あなたに出来る最高のことは、神に近づくこと（へりくだり）です」と言っているのです。（本稿16頁から重複転記）

神が望んでおられることはエノクのように「神とともに歩む」ことなのだろうという思いをもっています。

今回から文字の形が変わりました。これは本稿の推敲をなさってくださっておられる森容子先生が私の健康を配慮してくださり、監修と同時に推敲をしてくださるようになりました。メールのやり取りの間に文字が変化してしまいます。御言葉をゴシック、松山幸生先生本文を明朝体、写者が強調したい部分は丸ゴチにいたしました。行間の小文字は本文の頁数を表しています。森先生の精緻なご推敲、寛大なご指導によって読みやすくなりました。先生のご支援に言葉で言い表し難い感謝をいたします。

。　　2023年4月30日